

『わが故郷の深きみどり』

東山はるか

3198字

[梗概]

中学校を卒業して二十五年、四十歳になった同期生たちが母校の清掃のために集まった。木造の母校は保存され、地域の交流拠点になるという。夭折した同級生・中園芳子の思い出を語らうが、彼女と交際していた川上健司が今回の呼びかけ人だった。作業を終えた彼らは、亡き級友たちに黙とうする。

濃いみどりが校庭に陰影をつくり、そこだけが灼熱に感じられる。古びた校舎の中にはしかし、記憶のなかにあるのおなじ、涼やかな風がながれこんできた。

「もう卒業して二十五年にもなるのね。ついこのあいだのことみたいに思えるけど」

敬子がそう言うと、みんなも一樣にうなずいた。

作業台に置かれた掃除用具は、工務店を営んでいる川上健司が準備してきたものだ。教室に備え付けの掃除用具に比べれば、二十五年もの歳月がそこに感じられる。

ここにいる七人の男女は、母校の最後の掃除をするために集(つど)ったのである。彼らの母校である中学校は、来週にも地域の交流館に生まれ変わる予定なのだ。

「上の階は何期なんだろう。けっこう集まってるね」

川上が窓から上を見あげた。となりの教室には、五十歳前後とおぼしき先輩たちが集まっている。

耐震のために鉄骨で補強されてはいるが、歴史のふるい木造校舎である。保存と決まったときから、同窓会を中心にこの清掃作業が計画され、年次ごとの同期会に連絡がはかられた。しかし川上たちの同期は、七人しか集まらなかった。

「じゃあ、始めるよ。みんな、好きな用具をつかってくれ」

もうひとりの女性参加者、響子がモップを手にしながら言う。

「でも、川上君がお手本をしめしてくれないと。使い方がわからないのもあるんじゃないの。これはこれでいいの？」

モップを突き出すように動かしてみせた。

「大きなモップは、ふつうにクリーナーをつけて。汚れを落したら、ワックスをつけた小さな、このモップで。わかるよね。この電動式のポリッシャーは経験がないと使えないから、おれ専用だ。それからハンディモップね、これは窓の棧を。女子でも上のほうに届くだろ。あとは自由につかって。ああ、そうだ。みんなも軍手をつかってね。すい針があるとやっかいだから」

「はい」

「ああ、それから。木村と松尾は裏庭のスクラップを運ぶの、手伝ってやってくれないか。外を担当の同期会が、女子しか集まらなかったんだって。リヤカーで倉庫の前まで運べば、業者が取りに来るからって」

「うーす」

秋のひざしがまぶしく、教室の壁まで反射光が照り返している。壁のモルタルに刻まれた落書きやおびただしい疵(きず)。それらはすべて、ここに学んだ少年少女たちの息づかいを宿したままだ。落書きは消さずに、とっておこう。

作業に慣れてくると、やはり思い出話の花が咲く。

七人にとって、いや、参加しなかった二十数人にとっても、強烈な思い出は交通事故で亡くなった中園芳子という女生徒であろう。彼女は快活で人気のある、すこしお転婆な少女だった。敬子と響子にとっても、それは鮮明な記憶だ。

「芳子、この席に座ってたんだよね」

「そう、この席だった。たしか、トレーラーのタイヤに巻き込まれたんだっけ」

「自転車に乗っててね。お葬式で川上君が泣いたの、あたしおぼえてるわよ。だから彼って、まだ独身なのかしら」

「やめて、敬子。泣けてきちゃう。芳子が死んだ話はダメよ」

廊下で聞いていた、柳浩一が近づいてきた。

「おい、川上が結婚しなかったのは、中園芳子の件があったからだって言うのか？」

「それは本人に訊いてみてよ。とにかく彼が泣いたから、もらい泣きしたのよ。ほんとに」

「川上と中園、付き合ってたんだっけ？」

「川上君たち、カップルだったんだもん。高校もいっしょに行くんだって、知らなかったの？」

敬子が結論を言ってしまったので、話はそれいじょうは広がらなかった。

「やっぱ、そうだったのか。この校舎が残されるのは嬉しいよな」

柳が感慨深そうに言う。

「でもさ、いまから考えたら、たったの三年間だぜ。いまのおれの三年間なんて、中学校の三ヶ月ぐらいじゃないかな」

敬子がそれを受けた。

「時間が速くなるのって、急がしいから？ それとも、すぐに結論を出しちゃうから、悩む時間がなくて、時間を速く感じるの？」

「たぶん、感動がないからじゃないか。あのころは、生きてるだけで楽しかったよな。休み時間中、笑ってばかりいた。わけもわからずに」

そこに川上がやってきた。自分の名前が出たのが耳についたようだ。

「きみら、話ばかりして。もっと手を動かせよ」

敬子が舌を出してわらった。

「新しいウエス、投げしてくれよ」

窓にのぼって、ガラスを拭いているのは尾崎昌樹だ。

「この窓ガラス、おまえが割ったの、おぼえてるか？」

川上が応じた。

「斎藤と喧嘩したときだろ。あいつ、バイクの事故で死んじゃったんだよな」

「そうなのか、知らなかったな」

「先生も亡くなられたよ」

「最後は支援学校に勤務だったらしいね」

いきおい、会話は物故者の話題になってしまう。

死者たちはしかし、鮮烈な記憶となって風景のなかに刻印される。それは永遠だからだろうと、川上はひそかに思った。気がつくやうに、敬子のすがたがない。

「敬子、どこ行っちゃったんだ？ モップ投げ出して」

「お化粧を直しに行ったのよ。川上君が来たから」

「本当かよ」

「ほんとだぜ、さっきから川上の話ばかりだよ」

だが柳も響子も、川上のまえで中園芳子の話題は避けた。

「お化粧するほど気になるかよ。じゃあ、中学時代に告ってたらよかったな。残念だぜ」

「まだ遅くはないわよ。彼女、独身なんだもん」

「へっ……」

川上が顔を赤らめた。

「そういえば、あたし。ここで川上君と柳君に、バストタッチされたことがあるわ」

「そんな。してないよ！」

というのは、柳である。川上が言い添えた。

「おれもしてないよ！ で、敬子が独身って、バツイチじゃなくて？ いや、どちらでもいいんだけど」

その言い方は、いかにも照れ隠しが明瞭だった。

「川上君。勇気を出して、彼女に言ってみれば？」

「……いやあ。よせよ、四十男をからかうのは」

彼らはそろって、ことし四十歳になった。

四十歳という歳はすでに若くもなく、しかし歳をとったというほどでもない。まだ野心や希望が生きる力となり、その実現の方法もそれぞれに蓄えられている。

それゆえに集まってみると、お互いに披瀝しあう話が生々しく感じられるのだ。語ってしまったあとには、羨望や嫉妬がまざる。三年ほど前に同窓会をやったときに、川上はそんな印象を持ったのだった。今回、集まりが悪いのもそんな印象が理由なのではないか――。

敬子がもどってきたのを合図に、五人はふたたび作業にかかった。いったん語りはじめれば、際限なく思いつ話がひろがりそうだ。いまは黙して、当時の感触を手に確かめたいと思う。

まもなく、当時と変わらないチャイムとともに、校内放送が昼食時間を知らせた。

「給食、出るのか？」

「仕出しの弁当だよ。体育館で昼食会だ」

ワックスで磨きあげた柱を、敬子がゆびさきで撫でた。

「ねえ、こんなに綺麗になったよ」

洗剤で汚れをおとし、ワックスで磨きあげた木肌が、清新なかがやきを放っている。

「ほんと、きれいだね」

彼女のネイルの美しさが、木肌をいっそう輝いてみせている。かつては、美人の英語の先生が、生徒たちの気合いを入れるために、柱をパンと叩いたこともあった。柱の木肌が二十五年前のかげやきと寸分かわらないと、五人には思えた。

「昼飯会の前に、中園芳子と斎藤克巳、亡くなられた先生のために、黙祷しないか？」

と柳が言った。川上はようやく、先刻の話が盛り上がったわけを知った。

「いや、それは木村と松尾が来てからにしよう」

緑のふかい裏庭を見ると、一陣の風が枯れ葉と砂を舞い上げたところだ。

こんなに綺麗な日に、生きていられるのは幸せなことだと、川上は思った。見知った者たちの遠い死は、おそらく日ざしの翳りとなって、この風景のかがやきをつくっているはずだ。

木村と松尾が裏庭からもどってきたので、川上は覚悟を決めた。きっと涙が出るだろうと思った。世代をこえた同窓生たちが一同に会しての昼食会で、涙をぬぐいながら挨拶をするのもいいと思った。(了)